

68 宿山寺

目下五首次二宮士觀韻

宿山寺に宿る

目下の五首 二宮士觀韻に次す

法王何必在西方

法王 何んぞ必しも西方に在らん

青山深處一僧房

青山 深き處 一僧房

墓邊草虫悲秋暮

墓邊の草虫 秋暮を悲む

龕裏佛燈照夜長

龕裏の佛燈 夜長を照す

世上榮皆草頭露

世上の榮 皆 草頭の露

心中塵已日前霜

心中の塵已に日前の霜

禪床相對寂無語

禪床に相對し寂として語無し

欲說玄々々亦忘

玄々を說かんと欲して玄 亦た忘る家

語釈

二宮士觀 人名。法王 佛、釈迦如来、仏法のかしらの意。青山 青い山、男子の死ぬことのできる山。一僧房 僧の住む部屋。墓邊 墓

の辺。しゅうば秋暮しゅうぼ||秋の夕暮れ、秋の終わり。龕裏がんり||寺の塔、塔の下したの部屋、仏壇、厨子、の裏。ぶつちう佛燈||。仏壇に灯す灯明。世上せじう||間、世の中。草頭そうとう||草の葉の上。しんちう心中||心の中、胸中。塵じん||俗世の煩わしい事柄。日前にちぜん||日の出前、早朝。禪床||禪の道場。相對||互いに向かい合い。寂さみ||寂、寂しい、静寂。じやく語無し||無言。げんげん玄々||奥深い上にも尚深い。

通釈

釈迦如来どうして必ず西の方に在られる、青々と山の深い処の一つの僧侶の部屋、墓の辺りの草の虫が秋の終わりを悲しむ、厨子の仏壇に灯す灯明が夜長を照らす、世間の栄えるのも草の葉の露、胸の中の世俗の煩わしさも既に日の上る前の霜のようだ、禪の道場に互いに向き合い静寂で無言である、奥深い上にも尚深さを説こうとするが深さにまた忘れる。

69 漁父

りようふ
漁父

不須世上買虛名

すべ せじょう きよめい
須からざる世上に虚名を買う

來往江湖送此生

こつこ らいおう
江湖に來往して此の生を送る

移艇恐驚鷗鳥睡

てい おうちよう ねむ
艇を移し恐れ驚き鷗鳥 睡る

横竿静看鯈魚行

せいかん はやうお
竿を横に静看すれば鯈魚行く

棹聲發處水輪碎

とうせい はつ ところ ひようりん くだ
棹聲 發する處 水輪 碎ける

笠影落邊秋水清

りゆうえい らくへん しゆうすい きよ
笠影 落邊 秋水 清し

一自蓑衣釣煙雨

さいい えんう
一たび蓑衣より煙雨に釣る

簪纓印綬點塵輕

しんえい いんじゆ てんじん
簪纓に印綬の點塵 輕し

語釈

漁父＝漁師、漁をすり人。須＝すべからく、暫し、求める。世上＝せじょう 世間、世の中。虚名＝きよめい 「うわべだけ名高くて実質の伴わない名譽、うわ

べだけの評判。往く＝いく 行く。江湖＝こつこ 大きな川や湖、人里離れた川や湖の辺、朝廷に仕えず世を捨てた人の居る所のとえ。艇＝てい 小舟。驚恐＝おどろきおそれる 驚いて怖がる。鷗鳥＝おうちようめ 鷗。睡＝すい ねむ 睡眠。鯈魚＝りゆうぎょ はや、おいかわ。棹＝たく ざお 棹。水輪＝ひようりん 水の輪。波紋＝はもん 月。邊＝へん 辺。蓑衣＝さいい 蓑。蓑を着る。簪纓＝しんえい

冠を止めるこうがいと冠の紐、てんじて高官の服装、又夫れを着る身分の人。印綬いんじゅう。昔官吏が身に付けた印と紐。點塵てんじん。小さな塵、俗世の小さな出来事。

通釈 求めずに世間のうわべだけの名譽を買う、人里離れた世を捨てた人の処を行き来して此の余生を送る、小舟を動かすと恐れ驚く鷗鳥かもどりが睡る、釣り竿を横にして静かに看るとハヤやおいかわが行く。棹の音がする処水に映る月が碎ける、笠の影の落ちる辺りは秋の水が清く冷たい、一度蓑を着て煙る雨の中で釣る、高官の服装に昔官吏がつけた印と紐は小さな塵や俗世の小さな出来事より軽い。

70 暁行

暁あかつきに行く

梵しげ醒りよかん旅館さめ暗あんとう燈とう残ざん

梵しげる旅館りよかんに醒さめれば暗あんとう燈とう残ざんり

起き着き草鞋そうけい衝つ暁寒ぎようかん

起ききて草鞋そうけいを衝つければ暁寒ぎようかんを衝つく

山驛さんえき石いし多おほ尖さんしやう似に鋸のこぎり

山驛さんえき石いし多おほく尖さんしやうく鋸のこぎりの似にし

水程すいてい流うす急たらい渦うず如ごと盤ばん

水程すいてい流うすれ急たらいにして渦うずは盤ばんの如ごとし

名奔な何は及およ三蕉さんしやう葉は

名なは奔はるも何おほんぞ及およばん三蕉さんしやうの葉はに

利走り危あやう於より百尺ひやくしやく竿さお

利りは走はりて百尺ひやくしやくの竿さお於より危あやうし

吾われ是こ烟霞えんか癩疾こしつ者もの

吾われれ是これ烟霞えんかの癩疾こしつの者もの

半生はんせい未まだ免か客途かくと難がた

半生はんせい未まだ免かれず客途かくと難がたし

語釈

暁あかつき 暁あかつき 夜明け、明け方。梵ふつ 茂る、茂ったさま。風が吹き渡る、清らかな汚れないさま。醒せい 醒る、覚醒。暗燈あんとう 行燈、暗い燈。草鞋そうけい

草鞋わらじ。暁寒ぎようかん 夜明けの寒さ、早朝の寒さ。衝しょう 要、衝く、突き破る、向かう。驛えき 宿場。尖すんとく 尖った。名奔めいほん 名譽に走る。三蕉さんしやうの葉よう 芭蕉の葉。]

百尺ひゃくしやく 約三十メートル。竿かん 竿。半生はんせい 人生の半ば、半分。途と 道、道中、途上、途中。烟霞えんかの癩疾こしつ 霞に煙る変わり者、頑固者、山水をこよなく愛

する心が強い。客途かくと 旅

通釈

草茂る旅館で眼が醒めれば行燈の灯りが残る、起きて草鞋を履けば夜明けの寒さを衝いて行く、山の中の宿場は石が多く鋭く尖り鋸のようである、水の程は流れ急で渦は盤たらいのようである名誉に奔るものどうして芭蕉の葉に及ぼうか、利益に奔って百尺の竿より危ない、私はこれ山水をこよなく愛する心が極端に強く、人生半ば未だ免れることは旅の途中で難しい。

71 赤壁圖

滿朝君子曰乾々

那及優游赤壁船

桂棹歌悲風拂水

洞簫聲冷月中天

禿頭疑是金身佛

長髯誰識玉堂仙

江山贏得良霄酒

獻酬一夜不成眠

赤壁の圖

滿朝の君子曰く乾々

那んぞ及ばく優游 赤壁の船に

桂棹の歌は悲しく風は水を拂う

洞簫の聲 冷たく月は中天

禿頭 疑う是が金身 佛

長髯 誰か識る玉堂の仙

江山 贏り得る良霄の酒

獻酬に一夜 眠りを成さず

語釈

赤壁せきへき 前出省略。圖ず 図、領土、地図、図る、企てる、画く。滿朝まんちよう 朝廷の全部の人、官位のある全部の人。君子くんし 「人徳才のある人。乾々

進んで止まぬさま、驕らず努力するさま。那な 「美しい、多い、安らか、なんぞ、いかん、なに、あの、かの。優游ゆうゆう 暇が有ってゆったりとしている

さま、のびのびと思いのまま。桂棹けいたく 桂の木で作った棹、又は舟を言うこともある。風水ふうすい 風と水、土地や墓地などを選定する術。洞簫とうしょう 尺八に似た

底の抜けた管楽器。長髯ちようぜん 長い顎髭。冷月れいげつ 清冷の月、冴えた月。天中てんちゆう 天の中。禿頭とくとう 禿頭。金身佛こんしんぶつ 全身金色の佛。玉堂ぎようどう 美しい宮殿、貴人、

富豪の邸宅。仙せん 仙人、樂。江山こうざん 川と山、山河、広く國土を言う。贏えい 甲蹴る、儲け、余る余り。良霄りようせう 宵、良い宵。獻酬けんしゆう 酒杯をやりとりす

る。

通釈

朝廷の官位のある全部の人人徳才の有る人は進んで云う、どうして行くのか伸び伸びと思いの儘に赤壁の舟に、桂の木の棹即ち舟の歌は悲しく風は水を払う、尺八に似た管楽器の音冷たく月は空の半ばに上っている、禿頭かと疑うこれが全身が金色の仏、長い顎髭誰か知る美しい宮殿の仙人、廣い国土に余り得る良い宵の酒、酒杯のやりとりで一晩中眠らない。

とうじつ
冬日
でんか
田家

茅を積み且く侍して日に頻と喧し
 山に傍より水に枕して幾村々
 胥吏の年 豊かにして門に到る無し
 饑を呼ぶ穉児 煨芋を乞う
 苦寒の老叟 陶尊に對す
 葉稀に窗樹の聲殊さらに静か
 泉は涸れて 溪流に響き 喧からず
 農事已に休みて未だ屋に乗ぜず

教え導く。葉稀はまれに||葉が稀に、疎そうじゆらに。窗樹||窓の外の樹木。對たいす||相對す、向かい合う。農事のうじ||農業の仕事。屋乗おくのる未だ||屋根が未だに葺けない。茅積かやっみ且侍かつじす||茅を集積しそして待つ。頻喧はけん||頻しなりに喧やましい。

通釈 山の傍らより水を枕にしたように幾つもの村が連なる、役所の小役人も年々豊かになり門に到達出来ない程である、飢えを訴える子供がうずみ火で焼いた焼き芋を欲しがる、寒さに苦しむ老人尊い教えに對する、木の葉は疎らで窓の外の音も殊に静かである、泉は涸れて溪流に響きは喧しくない、農作業は既に止み未だに屋根に乗らない、茅を積み暫くして待つと日に頻りに喧しい。

73 食胡瓜

きゅうり しよく
胡瓜を食す

身在西州欲盡涯

せいしゅう あ きわみ つく
身は西州に在りて涯を盡さんと欲す

為逢新味又思家

しんみ な
新味に逢うを為して又た家を思ふ

地暖偏驚物候早

ひと おどろ おつこう
地 暖かく偏えに驚く物候の早きに

熊城四月食胡瓜

ゆうじょう きゅうり しよく
熊城四月 胡瓜を食す

語釈

きゅうり しよく きゅうり
胡瓜を食す 胡瓜をたべる。 しんせいしゅう あ
身西州に在り 身、身体、自分には九州に滞在している。 がいしん ほつ
涯盡を欲す 生涯ここに居たい。 しんみ
新しい味、
あいな
逢為し 出会う。 じたん
地暖 土地柄暖かい。 ひん
偏に驚く とも驚く。 もの こう
物の候早し 作物の出来る季節が早い。 けいじょう
熊城 熊本城下、市内、街。
新しい試み。

通釈 私は九州に居て生涯を終わりたいと思う、新しい物や味に接した故郷の家を思ふ、土地柄は暖かく作物の出来るのが早く大変驚く、熊本では四月と云うのにもう胡瓜を食べる。

74 少年行（時在熊府）

少年行（熊府に在る時）
しょうねんこう ゆうふ

城中年少顏如華

城中年少くして顏華の如し
じょうちゆうとしわか かんばんせはなごと

城外年少顏如華

城外年少くして顏華の如し
じょうがいとしわか かんばんせはなごと

攀柳朝過張緒家

柳に攀り朝に過る張緒の家
よじ よき ちょうしよ

采蓮夕過六郎家

蓮を采り夕を過る六郎の家
はず と ゆうべ すぐ

與講孫吳闔龍蛇

與に孫呉に講じて龍蛇を聞かわす
とも せんご こう りゆうじや たた

共閑騎射騁_留駉_駉駉_駉

與に騎射を閑りて駉駉を騁る
とも きしや しき りゆうぎ はせ

宋朝蓬鬢々_鬢鬢_鬢鬢_鬢

宋朝の蓬鬢 鬢鬢の鬢
そうちょう ほうひん ひんさん ひん

子緞佩巾々整斜

子は緞に佩巾 巾 整いて斜なり
さいわい はいきん ちきり ととの ななめ

後庭秋唱深夜月

後庭 秋を唱て深夜の月
こうてい あき となえ しんや

玉樹春倚暮天霞

玉樹の春に倚り暮天の霞
ぎよくじゆ よ ぼてん かすみ

明眸皓齒夢絕些

明眸 皓齒 夢 些か絶す
めいぼう こうし いやな ぜつ

只願與君歡無涯

只だ願う君と歡び涯り無し
かぎ

君不見楊家春看過

君 見ずや楊家の春を 看過ぎるを

誰折一枝海棠花

誰 折る一枝の海棠の花

語釈

城中じやうちゆう 城内、市内。年少ねんしやう 幼年、少年、子供、青年。顔華かおはなの如しごと。童顔が花のように美しい、美男びゆうへ「夕ゆふ夕方、夜、晩ばん」城外じやうがい 城外の外、市外。攀はん によじ登る。張緒家ちやうしや 張の系統の家。蓮はを采さいし 蓮を採取。六郎 秦、漢の時代の官名郎、六の郎。孫呉そんご 孫武と呉起共に春秋時代の兵法家、又その兵法書の孫子、呉子。講ず 講義。龍蛇りゆうじやの闘とう 龍と蛇の戦いのように、甲論乙駁けつ互いに励む。騎射きしや 騎乗で矢を射る。閑かん 暇、流離う閑、長閑。騶りやう 栗毛、鬣と尾が黒い馬、此の時代の名馬。驢ろ 馬に坐る、乗る。騁てい 馳せる、疾走、まっしぐらに馳せる。宋朝そうちゆう 宋の王朝「蓬ほう によもぎ、仙人の住む所。鬢々びんひん 鬢、耳の際の髪の毛。髻さんひん 鬢の乱れ、乱れ髪、髪垂れるさま」殿か 幸い、祝福の言葉、大きい、立派。佩巾はいきん 帯び玉、腰に下げる飾りの玉と巾、帯。巾整きんとじやうい 巾、帯が整う。後庭うしやうてい 裏庭、奥庭、官女達の居所。玉樹ぎよく 美しい木、美しい姿の人のたとえ、優れた才能の持ち主のたとえ。春倚しゆんぎ 春珍しい、不思議な、依る、頼る、縋る。暮天ぼん 夕暮れの空。明眸めいぼ 明るい眸、涼やかな眸、美人。皓齒ごうし 白い歯。些さ 些細、僅か、些少。涯無がいし 果てしない、生涯。楊家やうけ 楊の家系。海棠かいとう 薔薇科の落葉低木、四月頃、淡黄色の五弁の花を咲かせる、なよなよとした美人の形容

通釈 城中でも年若く顔は華のようである、城外でも年若く顔は華のようである、柳によじ登り朝を過ぐす張織の家、蓮を採取して夕べを過ぐす六郎の家、共に孫子、呉子の兵法を講義して甲論乙駁して互いに励む、共に閑を見て名馬にまたがり騎乗して矢を射る、宋王朝も蓬や耳の生え際の髪の乱れるように、貴公子は幸い帯び玉の中も斜めに整い、官女達の居所、奥庭も秋を告げる深夜の月が輝く、姿の美しい春に珍しく夕暮れの霞がかかっている、

明るい眸に白い齒の美人の夢を僅かに断つ、只願う君と歆びの限りを尽くしたい、君見たまえ楊家の春がみすす
過ぎるのを、誰が折る一枝の海棠の花を。

75 南郭先生百年遠忌賦而呈靈下

南郭先生百年遠忌賦して靈下に呈す
なんかく えんきふ れいか てい

金龍山月照千秋

金龍山の月 千秋を照す
こんりゅうざん せんじゅう てら

誰識真龍臥在湫

誰か識る真龍の湫に在りて臥すを
し しんりゅう しゅう あ が

律細元非濫吹者

律 細かく元を濫に吹く者に非ず
りつ こま もと みだり もの あら

調高定是善歌流

調は高く定りて是れ善歌 流る
しらべ ぶんしょういちだい せんか ぜんか

文章一代推王李

文章一代にて王李を推す
ぶんしょういちだい おうり お

經術百年傳魯鄒

經術百年にして魯鄒を傳う
けいじゆつ ねんしゅう つた

草屋終無三顧客

草屋 終に三顧の客 無し
そうおく つい さんこ

拄操彩筆作優游

拄て彩筆を操りて優游を作さん
ささえ さいひつ あやつ ゆうゆう な

語釈

服部南郭 一六六六、一七二八、萩生祖來の高弟。遠忌 遠い忌日、昔、古い、百年忌。賦 詩を作る。靈下 靈前、墓前。呈す 示す、

差し出す、差し上げる、進呈。金龍山 どのかの山。千秋 千年、長い年月。真龍 真の龍、本当の龍。臥す 伏せる、寝る、横臥。湫 低地で湿

っている、低い、狭い、窪んでいる。律 音楽の調子、音階、音律。調 調べ、音楽を奏でる、調子。文章 あや、もよう、かざり、文字を連ねて一

つのまとまった意味を述べたもの。濫 みだりに、汜濫。一代 一人の一生。王李 人名、王の名のつく家系。推す 推薦する。經術 經學に同じ、

經學に基く政治の方法。魯^ろ魯^ろは孔子の生国、転じて孔子の教えを言う。鄒^{そう}鄒^{そう}は孟子の生国、転じて孟子の教えを言う。傳^{でん}傳^{でん}は伝える。草屋^{そうむく}茅屋。三顧^{さんこ}三顧^{さんこ}は礼を尽くして賢人を招くこと、三国の蜀の劉備が諸葛亮を招くにあたり其の家を三度も訪れたと言う故事。操^{そう}し操^{そう}り、操^{そう}作、使^しう。優游^{ゆうゆう}閑があつてゆったりとしているさま、のびのびとして思いのままなさま、ゆったりとおちついて学問や芸術を深く味わう、悠々自適^{ゆうゆうじじつ}。拄^{ちゅう}拄^{ちゅう}は支える、上げる、そして、退ける、衝く。彩筆^{さいひつ}彩色、筆で彩色する。

通釈 金龍山の月長い年月を照らす、誰か知っているだろうか真の龍が狭い窪地に在って横臥しているを、音律細かく元来吹くものではない、調子は高く定まってこれ良い歌が流れる、文字を連ねて一代にして王李を推す、經學に基く政治の方法は百年にして孔子や孟子を伝える、茅屋ついに礼を尽くして賢人を招く客人はない、支えて彩筆を使ってゆったりと落ち着いて学問や詩歌を深く味合う、悠々自適。

76 游畫湖湘陰亭

湘陰亭湖に畫いて遊ぶしやういんていこ えが あそ

沙明水又緑

沙明らかにして水 又た緑なりすな

一幅瀟湘図

一幅瀟湘の図いつぶく しやうしやう ず

鴻鴈無消息

鴻鴈消息 無しかうがん しやうそく

客心満畫湖

客心 畫くをを満たす湖かくしん えが み みずうみ

語釈

湘陰亭 湖の辺の亭。遊び 遊び。畫く 画く。沙明 白沙の明るさ。一幅 布や紙等の一枚。書や絵の掛け物を数える。瀟湘 瀟水

と湘水の合流してゐる所。湖南省洞庭湖の南方瀟湘八景の名勝地。図 絵を描く。鴻鴈 秋に来る渡り鳥大を鴈小を鴈。雁という、転じて離散して彷徨う民のたとえ。詩経、小雅の編名、離散した民を安定させた周の宣王を称えた詩。消息 暮らしている様子、離れて居る人の連絡の有無、その筋の通。客心 客の心。畫き 描く。

通釈 白い沙は明るく水また緑である、一幅の瀟湘八景の絵は、秋に渡る鴻に雁転じて離散して彷徨う民の暮ら

している様子はわからない、離散した民を安定させ満たすを画く湖。

77 題畫

題畫 だいが

阿誰髡柳外

阿誰 あすい 外 そ の柳 を 髡 る

細雨釣烟波

細雨 さいう の烟波 えんは に釣 る

渭水豈吾獨

渭水 いすい 豈 あに 吾 れ 獨 り

閑人今似多

閑人 かんじん 今 今 多 く に似 に たる

語釈

阿誰 あすい 髡 こん 誰 を 髪 を 剃 る、坊主頭、首。細雨 さいう 細 さい かい雨、小糠雨。烟 えん 煙 り、烟 けむり。渭水 いすい 中国の川の名。閑人 かんじん 閑 ひま な人。

通釈

誰か外の柳を剃る、小糠雨の烟る波に釣る、渭水どうして私独りだろうか、閑な人今多く真似るのに。

78 與杏所携酒觀菜花

於熊城東郊

杏所きやうしよと與ともに酒携たすさえ菜の花を觀みる
熊城東郊ゆうじやうとうかうに於て

謾々清風杉樹陰

謾々しゆくしゆくと清風せいふう 杉樹さんじゆの陰かげ

々々對酒共閑吟

樹陰じゆいんの酒に對し共に閑吟かんぎんす

眞成沃野一千里

眞しんに沃野よくやを成なす一千里いつせんり

滿野菜花滿野金

野みに滿さいかちる菜花 野みに金さいかを滿みたす

語釈

杏所きやうしよ||宮宅杏所、医者いしや。携え||携行、持つて、提げて、一緒に。熊城||熊本、城下市内、街。謾々||高く抜きんでているさま、松風の音の形容、風松籟。清風||清らかな風。杉樹||杉の木。樹陰||木陰、樹木の陰。閑吟||長閑に吟じる。沃野||肥沃な土地、野。一千里||千と広く遠い、限りなく広い。滿野||野に満ちる、花が一杯に。

通釈 高く抜きんでて風の音が清らかな風を運ぶ杉の木の蔭に、木陰に對して共に長閑に吟じる、本当に肥沃な野は千里と遠く廣い、野に満ちる菜の花は野に金を満たしたようである。

79 咏龜鶴二宮土觀囑壽

其嚴君六十

きかく えい にのみやしかん ことほぎ しよく
龜鶴を咏じて二宮土觀に壽を囑す形

其の嚴君六十
げんくん

朝戲十州暮九天

たわむれ じつしゅう 暮れに九天
朝に戲て十州 暮れに九天

延齡能得保千年

えんれい よ たも え
延齡 能く千年を保ち得たり

孤山春夢梅邊屋

こざん しゅんむ ばいへん おく
孤山の春夢 梅邊の屋

赤壁秋心月下船

せきへき しゅうしん げつか ふね
赤壁の秋心 月下の船

清淚忽聞華表上

せいるい たちま かひよう じよう き
清淚 忽ち華表の上に聞く

玄裳長占翠松顛

げんしょう し すいしょう いただき
玄裳 長く占む翠松の顛

風神元不塵中物

ふうじん もと じんちゅう 物にならず
風神 元より塵中 物にならず

知是遼東第一仙

し こ りようとう だいいち せん
知る是れ遼東 第一の仙

本是龍麟鳳匹儔

もと こ りゅうりん ほうちゅう ひつ
本に是れ龍麟に鳳儔に匹す

北方靈物卜明幽

ほつぽう れいぶつ めいゆう ぼく
北方の靈物 明幽を卜す

一從曳去泥中尾

ひと ひ よ ぐいちゅう び
一たび曳き去りて従り泥中の尾

幾度伸來牀下頭

いくたびのきたそつかとう
幾度か伸び来る牀下の頭

瀨氣吐吞三島水

いづきをはのさんとう
瀨氣吐きて吞む三島の水

玄精閉固十州秋

げんせいへいこじゅうしゅう
玄精に閉固 十州の秋

而今鑽灼毫無患

さんしゃくすこしわずらな
今にして鑽灼す毫も患う無し

藏六千春得自由

六千を藏して春の自由を得たり

語釈

二宮土觀にのみしかん人名。囑しゆく委囑、頼まれる。龜鶴きかく長寿、長寿の祝い。壽いせい壽、久しい、長寿の祝い。咏えい詠う。其嚴君そのげんくん父母、とくに

父、父君。巫華表かひようその形が華の横木をつけたもので道に立てた道路標識、のようであるから華表かひようと言う。玄裳げんしよう黒色の袴。占せんし占有、占めて。翠松すいしょう

緑の松。顛てん頂き、頂上、頭。風神ふうじん風の神。塵中じんちゆう塵の中、世俗の煩わしい中。遼東りょうとう秦代に置かれた郡の名、一人よがりの世間知らずの遼東

の人が白頭の豚が生まれて珍しいので献上しようと河東まで来たら河東の豚は皆白頭で在ったという故事。仙せん仙人、樂りやうりん龍麟りゅうりん龍に麒麟。鳳ほう鳳、

とり、聖王の世に現れると言うめでたい神鳥、雄を鳳ほう、雌を凰ほうと言う。匹儔ひつちゆうともがら、仲間。中物ちゅうぶつ中位の者、物。靈物れいぶつ万物の靈。明幽めいゆう幽かな

明るさ。卜ぼくす占う。一去いっく一度に、一散に。泥中でいちゆう泥の中。牀下さうか床の下、寢床の下。瀨氣せいき天上の清らかな氣、秋の天氣。玄精げんせい真の魂。鑽灼さんしゃく。

昔の裏なの法、瓶の甲に穴を開け焼いて割れ目の形で吉凶を占う。毫ごう細毛、少しも、僅か。戯たそあそびに山戯て、冗談に。十州じしゅう伝説で中国をとりまく

海にある十の島、仙人が住んでいると言う。九天きゅうてん天を方角によつて九つに区分したもの。延齡えんれい年齢を伸ばす、長生きするように。孤山こさん一つの山、

孤立した山。春夢しゅんむ春の夢、春眠曉を覚えず。梅邊ばいへん梅林の辺り。赤壁せきへき前出。秋心しゅうしん秋の空のように変わり易い心。月下げつか月下、月下。清淚せいみらい清い涙。忽たちまち

ち。突然、直ぐ。華表かひようの上柱の上に十字

通釈 朝に戯れて中国を取り巻く十の島に棲む仙人が暮れに天を九つに割り、長生きをするように良く千年を保

ち得たものだ、孤立した山の春の夢は梅林の辺りの家に、赤壁の秋心は変わり易いが月下の舟は、清い涙は忽ち華のような標識柱の上に聞く、黒色の袴は長く翠の松の頂を占める、風の神は元来世俗の中の物ではない、知るやこれ遼東第一の仙人、元々これ龍に麒麟と鳳凰の仲間に匹敵する、北方の万物の靈幽かな明るさを占う、一度曳き去りてより泥の中の尾を、幾たびか伸びて来た寢床の下の頭、天上の清らかな大氣を吐いて吞む三島の水、真の魂を閉じ固める十島の秋、六千を蔵して春の自由を得た。

80 一夜、韃郵先生示其詩、

使裕改之、裕不自揣、

書所見、

且賦一詩以謝僭妄之罪云、

一夜、いちや いそん韃郵先生に其の詩を示し、

ゆたかこれ あらたま し裕之を改め使む、ゆたか はか裕自ら揣らず、

見た所を書す、

且つ一詩を賦して以て僭妄の罪を謝して云う、

求益一宵下杏壇

先生壯氣老猶殘

月門誰扣浪仙夢

(此夜將應睡先生召裕)

雨後應憐東野寒

(賜酒)

不是削圓方竹杖

乃知躡着截雲冠

先我已平安叟

えき いっしょう きょうだん くだ益を求め一宵 杏壇の下り

そうき お なお先生の壯氣 老いて猶を残す

げつもん たた月門 誰か仙夢の浪を扣く

(此夜 將て應に睡る先生 裕を召す)

まさ あわれ とつや かん應に憐む東野の寒

(酒を賜う)

けず まる たけ つえ是れを削らず圓く方に竹の杖

すなわ じょうちやく うんかん た乃ち知り躡着して雲冠を截つ

すで へいあん そう我に先んじて已に平安の叟 有り

漫把雌黃向柳韓

余一日與宮士觀語

及神仙事、士觀云僕

嘗得一書、凡十卷、

似說神仙事、讀之不解、

欲賣不售、以為與東高

閣付蠹魚寧以學書遂援

筆塗抹焉、猶存二卷出

而示之、其九則紙々皆、

黑矣、不可辨為何書也、

其一則卷首數葉、龍飛

龍飛蛇走、殆欲黑矣、熟視

之即悟眞篇也、余不覺

漫に雌黃を把りて柳韓に向う

余は一日宮士觀と語す

神仙に及ぶ事とし、士觀 僕に云う、

僕嘗て一書を得たり凡そ十卷

神仙の事を説き似て、之を讀むも解せず、

賣らんと欲すれど售れず、以て與東高

閣の蠹魚に付す、寧ぞ以て書を學び

遂に塗抹して焉く援筆し、猶お二卷を存し出して

之を示す、其の九則紙々皆黑なり

辨ずる可からず何んの書を為す也、

其の一則卷首數葉、

蛇走、殆んど黒ならんと欲するかな、熟視して之れ

即ち眞篇を悟る、余は覺えず

失笑曰、可惜々々、兄
亦大笑、余欲得之、兄
乃許之、余嘗讀白玉蟾
、知有悟真篇者、欲

得之者久矣而今偶然得
之、殆似有仙分也、而
士觀不知其為何書、塗
抹黑之是無心而然
耳、古云無心得大還、
士觀此心無乃仙乎、
因戲賦一詩以似士
觀、博其一燦

宮子嘗得一丹書

失笑して曰く、惜む可し惜む可し、
兄亦た大笑する、余は之を得んと欲す、兄
乃と之を許す、余は嘗って白玉蟾
集を讀んで知り、眞の篇者を悟る有り、

は得んと欲して者久しき矣、而て今偶然にも之を得て
、殆んど仙有るに似たり分けて也た、
士觀は其の何んの書を為すか知らず、黒に
塗抹し之れ是を無心にも然る
のみ
耳、古く云う無心大還得ると、
士觀此の心無くして乃ち仙乎、
因て戲れに一詩を賦して以て
士觀に似せて、其の一燦に博す

宮子嘗って得る一丹の書

下論九泉上大虚

下に論ず九泉 大虚に上る

讀之茫然不能解

之を讀んで茫然 解くを能はず

架上擲去付蠹魚

架上に擲去して蠹魚に付す

春風一夕讀書倦

春風の一夕 書を讀んで倦れ

取彼丹書命筆硯

彼の丹書を取りて筆硯を命ず

王帖顏碑向之臨

王帖 顏碑 之に向いて臨す

丹經變為陳玄面

丹經に變じて陳く玄面を為す

南子聞之笑恬然

南子之を聞き笑つて恬然

嗚乎宮子已得仙

嗚乎 宮子 已に仙を得る

無心即是九還耳

無心即ち是れ九に還する耳

大道何在悟真篇

大道 何んぞ真篇を悟るを在らん

鉛汞元來家々有

鉛汞は元來 家々に有り

唯憂丹經荊棘多

唯だ憂う丹經 荊棘 多し

恨不盡付塗抹手

恨み盡ず塗抹 手に付するを

人々當得千載壽

久矣吾之厭世塵

寶錄秘笈近相親

茫然同君苦難解

今日因君頓悟眞

從今日々鍊大藥

共享千年不死藥

崑崙上兮蓬壺下

相携白日騎白鶴

ひとびと まさに せんざいの じゆ え
人々 當に千載の壽を得ん

くはかな われのれ せじん いと
久かな吾れ之れ世塵を厭うを

ほうろく ひきゆう あいした
寶錄の秘笈 近く相親し

ぼうぜん とも ときがた くるし
茫然として君と同一に解難きに苦む

こんにち よつ つまず
今日君に因て眞に悟るに頓く

たいやく ね
今に従い日々大藥を鍊る

ふし やく すす
共に千年 不死の藥を享める

こんろんじよう ほうこ か
崑崙上 蓬壺下

あいたずさえ はくじつ はくかく き
相携て白日 白鶴に騎さん

語釈 一夜^{いちや}一晩、一夕、或る夜。韃^{いさん}郵^{いさん}木下^{いさん}韃^{いさん}郵^{いさん}南部五竹の先生。裕^{ゆう}之^{これ}改^{あらた}ま五竹本人が威儀を正して、畏まり。裕^{ゆう}自^{より}ら揣^{はか}らず五竹が、

推し量る事ができない。揣^{たん}量^{りょう}る、推し量る、試みる。賦^ふ詩賦。僭^{せん}妄^{もう}妄^{もう}に身分を越えて上の者の真似をする。益^{えき}利益、増える。一宵^{いつしやう}一夕。杏壇^{きやうだん}

孔子が学問を教えた所、学問所、講堂。壯氣元氣、盛んな氣力。扣^こ叩^くく、控える、引き留める。浪仙^{ろうせん}仙人が彷徨う、流離う、放浪。已^{すで}に最早

もう。應^{おう}ず應^{おう}じる答える。憐^{あわれ}み憐^{あわれ}憫^み、可哀想。東野^{とうや}の寒^{かん}東の野の寒さ。圓方^{えんぽう}円は丸い、方は四角。躡^{じようちやく}着^{ちやく}人の足を踏みつける。截^{せつ}叟^{そう}僅^ゆか

の間きれる。截^{せつ}切る、断つ、切断。叟^{そう}翁^う老人。雲冠^{くわん}す雲がかぶる。平安^{へいあん}穏やか、安らか。漫^{まん}広い、水の広々と果てしないこと、蔓延^{まんえん}る。雌黄^{しじやう}

疏黄と砒素の混合物、薬用、昔詩文に誤りがあると雌黄を塗って直したことから転じて文字を書き改めること。把^はとる、掴む、握る。柳韓^{りゅうかん}柳

宋元と韓愈、共に文詩に優れた。宮土觀きやうしかり二宮土觀しきやう。神仙しんせん仙人しやうじん。嘗しやう前に、以前嘗める、試みる試す、嘗て。事説じせつ事柄じへい。賣欲ばいす賣りたい。售しやうす賣る、売れる。寧ねい安らか、むしろ、なんぞ、それ。よりは。援えん引く、助ける、救う。高殿こうけん高閣こうかく。高樓こうろう。蠹魚どぎよシミ、衣服や書物を食う虫。何時も本を詠んでいる人を嘲り言う言葉。援筆えんひつ筆を執って字を書く。塗抹とまつ塗りつぶす、抹消。卷首かんしゆ巻の最初。龍飛蛇走りゆうひやそう龍が飛び蛇が走る。眞篇しんぺん本物の本。余覺おほえず失笑しつしやう曰く自分は思わず笑ってしまった。仙分せんぶん仙人の領域。戯たわむ冗談に、巫山戯て。無心むしん心になにも留めない。一燦いつさん明らか、鮮やか光がきらきら光る、煌めく。茫然ぼうぜんぼうつとしてはっきりしない、ぼうつと出来な。架上かじやう書架の上、本棚の上。擲去ていきやう投げ出す、放り出す、放り放し。倦けん倦怠、飽きる、疲れる。丹書たんしよ短冊昔赤雀が口にくわえて持ってきた書物と伝えられる、書物の名。筆硯ひつげん筆と硯、詩文を作りまた書物著すこと。王帖おうじやう書き物、書き付け。顏碑がんひ額文、額に文字を書く、扁額。丹經たんけい丸薬を錬り作る法。陳玄ちんげん墨の別名、古くて黒いの意。南子なんし南部五竹。恬然てんぜん恬淡、静かで安らかなさま、物事にとらわれないでのんびりしているさま。博たか博く行き渡る博い。嘗しやう嘗める、試みる、試す、嘗て。一丹いつたん丸薬。九泉きゆうせん大地の下、地底、墓。大虚だいきよ大空。茫然ぼうぜん唾ない。九還きゆうかん数多還る。大道だうだう大なる道、人の行ふ筋道。元來げんらい元々眞篇しんぺん本当の本。鉛汞えんかう鉛と水銀、みずがね。家々いえいえ多くの家。千載せんざい千年、長い年月。壽じゆ寿、長寿。荊棘けいきやく荊、障害となるもの、紛糾した事態のたとえ、悪心のたとえ。塗抹とまつ塗りつぶす、抹消。世塵せしん世間の煩わしさ。寶錄ほうろく大事な書物、録、ふみ、しよもつ、道家の秘文、本箱。秘笈ひきやくおい、笈箱、大切な書物など入れてある竹製の箱。頓とん頓、額ずく、留まる、躓く、にわかに。享かう享く、享受、うける。不死ふし死なない。崑崙こんろん昔中国の西方にあると考えられた靈山、西王母と言う仙女が棲みまた美玉を産したと言う、山脈の名。蓬壺ほうこ仙人の壺、酒、薬を入れる。相携あひたすまへて提携、互いに提携携えてき。白日はくじつ昼間、日中、白昼。白鶴はくかく白い鶴。騎き馬に乗、乗る。

通釈 一夜韃靼たたん先生に其の詩を示し、之れ改めしむ、裕自ら試みず、見た所を書く、且つ一詩を賦して妄りに身分を超えて上の者の真似をする罪を謝りて云う。利益を求め一夕学舎の下り、先生の盛んな氣力老いて猶残す、月の門誰か仙夢の浪を叩く、「この夜以て当に眠る、裕を召される」雨の後將に憐れむ東野の寒さ、「酒を賜う」これを丸く削らず

四角な竹の杖、則ち人の足を踏みつけて雲冠を切断する、私より先に穏やかな老人有り、廣く文字を書き改めて柳宋元と韓愈に向かう、私は一日二宮士観と語る、神仙の事とし士観が僕に云う、以前一書を得た凡そ十卷、神仙の事を説き以て之を読むが理解出来ず、売りたいと思うが売れず以て束にして高樓の、蠹魚に付す、「転じて何時も本ばかり読んでる人を嘲り云う言葉」ここに以て書を学び遂に筆を執って塗りつぶして暫く、猶二卷有り出して之を示す、その九つ則ち紙また紙皆真つ黒である、何の書か見分ける事が出来ない、その一則ち卷首数枚、龍が飛び蛇が走る、殆ど真つ黒である、熟視して之則ち真篇であることを悟る、私は思わず失笑して云う、惜しいこと惜しいこと、兄亦大笑い、私はこれを得たい、兄則ち之を許す、私は前に白玉蟾集を読んで知り真の篇者を悟り、之は得たいと思ひ久しいことである、今偶然にも之を得て殆ど仙人みなったようである、分けて亦は其の何の書かを知らず、黒に塗り潰し之を無心にも之を当然のようである、古に云う無心大還を得ると、この心無くして則ち仙であろうか、因て戯れに一詩を賦し以てに似せて其の光輝き博くゆきわたる。二宮士観前に一丹の書を得る、下に大地のしたを論じ大空に上る、之を読んで嘩然呆然解く事が出来ない、棚の上に放りだして蠹魚に付す、（蠹魚、木喰い虫、転じて何時も本ばかり読んでる人を嘲り云う言葉）春風の一夕書を読んで疲れ、彼の昔、赤雀が口に銜えて持って来たと伝えられる、書物を作りて詩文を作り書物を著す、書き物や額文之に向かつて臨む、丸葉の製法の書変じて博く黒い面を為す、南部五竹は之を聞き笑って恬淡として、嗚呼二宮士観既に仙を得る、無心即ちこれ九に還すのみ、人の行う筋道はむしろ真

篇を悟るにあらう、鉛と水銀は元々家々にあり、人々千年の寿命を得たい、只憂う丸薬の製法の書に障害となるものが多い、恨みは尽きず塗抹に手を付けたことが、久しいかな私はこれ世俗の煩わしいことを厭うを、大事な書物の秘めた笈箱を近くに互いに親しむ、哑然呆然君と共に解き難きに苦しむ、今日君に因て真を悟るのに躓く、今に従い千年不死の薬を奨める、西王母という仙女の棲んだ崑崙は上に仙薬を入れる壺は下に、相携えて白昼白い鶴に騎乗しよう。

81 發熊城

熊城ゆうじょうを發たつ

朱日燔頭赫不行

朱日しゅじつ 頭かを燔やきて赫かがやきて行かず

流汗拭了又縦横

流汗りゅうかん 拭ぬぐ了おわて又じゅうおう縦横

元是此行欲避暑

元もと 是これ此この行暑こうしょを避さけんと欲ほつす

却衝炎熱發熊城

却かえつて炎熱えんねつを衝つきて熊城ゆうじょうを發たつ

語釈

熊城ゆうじょうを發はつ 熊本城下を發たつ。衝きき押おして、衝ついて。炎熱えんねつ 炎暑、酷暑。朱日しゅじつ 太陽。燔はん 焼く、炙る。赫かく 赤い、熱い、輝かがやくしている

さま。拭了 拭き終わる、去る。縦横 縦と横、縦横無尽、自由自在

通釈 太陽が輝き頭を灼いて行けない、流れる汗を拭き終わり又自由自在に、元々これ此の暑さを避けに行きた

いと思うが、却って灼けるような暑さを衝いて熊本を發つ。

82 十四日游江某宅歸途歩月

十四日江の某宅に遊び歸途月に歩して

長堤草露夜將闌

長堤の草露 夜將に闌なり

拂面海風六月寒

面を拂う海風 六月にして寒し

斯景斯人難復得

斯の景の斯の人復た得難し

眉山々色月中看

眉山の山色 月中に看る

語釈

江某かうぼう江以下氏名不詳。遊びあそ遊あそび。歸途きと歸る途中。長堤ちやうてい長い堤。夜闌よるらん夜闌。將まさにまさ今、丁度今。拂面ふつめん顔面にふきつける、さ

つと面に吹く風。海風かいふう海の風。斯景しけい此の景色。斯人しじん此の人。眉山びざん島原の山の名。山色さんしよく山容。月中げつちゆう半ば、月の中。看る見みる。

通釈 長い堤の草に露が降り夜は今真っ盛りである、顔面を撫でる海風は六月と云うのに寒い、この風景に斯

の人はまた得るのは難しい、眉山の山容は月半ばで看る。

83 高橋買舟渡島原

紫暝波穩如坦地
眺望四山坐船鼻
四山遙々連遠天
中有巖然一峯翠
舟人指點是雲仙
々々如仙最秀異
雲鬢霞裳倚半天
々仙可望不可企
一望茫然日西頽
明月忽弄夜珠來
蒼溟俄變黃金闕
眞成九華寶帳開

たかはし
高橋舟を買って島原に渡る

しめい
紫溟波 穩にして坦地の如し
のぞ しざん なが せんび ざ
望む四山を眺め船鼻に坐す
しざん ようよう えんてん つらな
四山 遙々として遠天に連る
うち ぎぜん いちほう みどり
中に巖然としたる一峯の翠有り
しゅうじん さ てん こ うんせん
舟人 指すを點じて是れ雲仙
うんせん せん じこ しゅうい
雲仙 仙の如し最も秀異
うんかん かしょう なか よ
雲鬢の霞裳 半ば天に倚る
てんせん のぞ べ くわだ
天仙望む可し企てること可からず
いちほう
一望 茫然として日西に頽る
めいげつ たちま よる しゅう ろう
明月 忽ち夜 珠を弄して來る
そうめい にわか へん おうこん けつ
蒼溟 俄に變ず黄金の闕
きゅうか
眞に九華を成して寶帳を開く

帳中髣髴雲仙影

疑是玉環在蓬萊

此時風景殊奇絕

扣舷高歌舷欲裂

大魚驚愕蹴濤飛

金屑碎散金濤凸

忽見紫電閃島西

黑雲壓海望欲迷

雲仙忽然去無影

空洋洋々夜山低

舟子忽報風變矣

布帆粘檣舟俄止

大雨沛然翻盆來

疎蓬漏雨如覆水

帳中ちやうちゅうに髣髴ほうふつたり雲仙うんせんの影えい

疑うたがうらくは是これ玉環ぎよくかんに蓬萊ほうらいに在あり

此この時の風景ふうけい殊ことさらに奇絶きぜつなり

舷げんをたたき高歌こうかすれば舷げんは裂さけんと欲ほつす

大魚たいぎょ驚愕きやうがくし濤とうを蹴けりて飛とぶ

金屑きんしょう碎く散だり金きん濤とう凸とつとして

忽たちまち紫電しでんを見る島しまの西ひらめに閃ひらめく

黑雲こくうん海あつを壓おし望ぼつみ迷まわんと欲ほつす

雲仙うんせん忽こつぜん然ぜんと去かりて影かげ無なし

空ひろは洋ぼう々ぼうとして夜ひくの山ひく低ひくく

舟子ふなこ忽たちまち報ほうず風變かわるなりと

布帆ふはん檣しょうに粘ねばり舟にわか俄にわかに止とまる

大雨たいう沛然はいぜんとして盆ぼんを翻ひるがえして來きたる

疎蓬そほうの漏雨ろうう覆水ふくすいの如ごとし

衣濡身冷不成眠

短々夏宵恰如年

此苦本是所自取

蓬底困臥有誰憐

雨聲漸斷蓬窓白

遠寺曉鐘一聲傳

料知人家定在近

初喜此身得生全

起坐急掀蓬窓望

身在棲霞峯外船

衣は濡れ身は冷えて眠りを成さず

短々の夏宵 恰も年の如し

此の苦しみ本 是れ自ら取る所なり

蓬底に困りて臥すは誰か有って憐れまん

雨聲漸く断ちて蓬窓 白し

遠寺の 曉鐘 一聲 傳う

料り知る人家 定し近に在り

初て喜ぶ此の身生の全うする得たり

起坐 急いで蓬窓に掀じて望めば

身は霞に棲みて峯外に船に在り

語釈

高橋から買舟島原に渡る。高橋から舟を賃し切り島原に渡る。紫浪。紫がかった暗い海。平坦地。平らな土地。四山。四国の山。四方の山。船鼻。船先。遙々。遙かに。連り坐す。連座。凝然。一際高いさま、一際優れている。翠。緑、碧、翠。舟人。船頭。仙の如し。雲仙仙人の棲む山のように。秀異。秀でて異色。雲鬟。雲が輪毛、束ねて輪にした髪。みずら、神代、上代の髪型。霞裳。裳裾、下袴、霞んだ美しいさま、雲が裾をたなびかせている。倚。依る、因む、頼む、調子を合わせる、不思議な、珍しい。天仙。天に棲む仙人。一望。さっと見渡す。茫然。ぼうっとしては

つきりしない。顔かほ崩れる、衰える、落ちる、禿げる。明月めいげつ明るい月、十五夜。夜珠やしゆ夜露。弄ろうし弄ぶ、玩具に、戯れる愛でる。蒼溟そうめい青々と暗い海。俄にわかに急に、突然。闕けつ門、宮城の門、宮殿、足りない、掘る、隙間。九華きゅうか宮室や、器物の美しいかぎり、山名、明の王陽明が良知説を悟ったところ。寶帳ほうちやう宝の帷、引き幕。帳中ちやうちゆう幕の中、帷の中。髻髻びふつさながら、良く似たさま、仄か、ハッキリしないさま。玉環ぎよくかん玉の輪、腰に付ける飾り、丸い月にたとえる。蓬萊ほうらい仙人の棲む所。奇絶きせつ優れて珍しい、ずば抜けている。舷拍げんぱく舷を叩く。高歌こうか大きい声で歌を歌う。舷裂げんそつんと欲す舷が裂けるばかりに。驚愕きやうがく驚き愕然とする。濤とう波濤、大きな波。金屑きんせつ金の屑、金粉、星屑、金の濤凸とうとつ金色の波が高い。紫電しでん紫色に閃く、稲妻、昔呉に有ったと言う名刀、研ぎ澄ました刀の光、紫電一閃、鋭い眼光。閃せん閃く。海を壓おさ海を押さえ付け。布帆ふはん帆船の帆。檣しよう帆柱。粘ねばり粘、まとう。忽然こつぜん忽ち、あつと言う間に、つく。疎蓬そほう疎らに蓬の葉で葺いた舟の屋根。漏雨ろうう雨漏り。覆水ふくすい水をひっくり返すように。宵よ夕、夕方、宵のうち。恰あたかも恰こう、丁度、ぴったり。蓬底ほうてい蓬で葺いた船底。曉鐘ぎやうしやう曉の鐘。一聲傳いっせいつたう鐘の音が聞こえる。料知りやうち料り知る。定しさだめ。掀きえ掲げる、高く聳える、高く手でさし上げる。蓬窓ほうそう舟小屋の窓。棲霞せいけ霞みに棲む。峯外ほうがい峰の外。

通釈 紫の暗い海も波が穏やかで平坦地のようなのである、四方の山を眺め舟の舳先に座る、四方の山は遙かに遠く天に連なる、中に一際高く聳える一峰の翠が有る、船頭の指す点これ雲仙、雲仙仙人のようで最も秀でて異色である、翠の山容が美しく霞が裾をたなびかせて天に因む、天仙は望むもので企てるものではない、さっと見渡すとぼうつとしてはつきりしないが日は西に傾いている、十五夜の月が忽ち夜珠を愛でて来た、蒼暗い海が俄に黄金の宮殿に変わり、真に宮殿や器物が美しい限りと成り宝の帳とばりを開く、帳の中に仄かに似ている雲仙の影に、疑わしいのはこれ丸い月に仙人の棲むところがあると、この時の風景殊更にはずば抜けている、船縁ふなべりを敲き高歌たたをすれば舷ふなべりは

裂けそうである、大魚は驚愕して波濤を蹴り飛ぶ、金の屑が砕け散り金の波濤が盛り上がる、忽ち紫色の稲妻を見る島の西に閃くを、黒い雲は海を圧し望み迷いそうである、雲仙が忽然と消え去り影もない、空は洋く果てしなく夜の山は低く、船頭が忽ち風が変わると報らせる、帆船の帆が帆柱にまといつき舟が俄に止まる、大雨が盛んに降り盆を翻して来る、疎らに蓬で葺いた舟の屋根も雨が漏り盆の水を覆したようである、衣服は濡れ身体は冷えて眠ることも出来ない、短い短い夏の夕べも丁度年のようである、この苦しみは元々自ら取る所である、蓬で葺いた船底で困って横臥する誰かが有って憐れむ、雨音も漸く絶えて舟の蓬の窓も明るくなった、遠くの寺から夜明けの鐘が一声聞こえてくる、推量するに人家がきつと近くに在るだろう、始めて喜ぶ生を全うするかとできた、起きて座り蓬の舟窓を掲げ掲げて望めば、身は霞に棲んで峰の外に在り。

84 邂逅西田川島諸公

于洵美亭分得年字

西田川島諸公邂逅して于美亭に

洵りて年字を分け得る

高堂美酒恰如泉

高堂の美酒 恰も泉の如し

滿坐清風集衆仙

滿坐の清風 衆仙を集す

東野才慙非蓋世

東野の才蓋世に非ずを慙ず

韓公交喜辱忘年

韓公の交りに辱なき喜びて年を忘る

眉山繞屋文競秀

眉山 屋を繞りて文秀を競う

紫海當門詩比娟

紫海の門に當りて詩は娟に比す

只憾乍逢乍別去

只だ憾むは乍ら逢い乍ら別れ去る

明朝各隔白雲天

明朝 各々 隔つ白雲 天

語釈

年字 邂逅 偶然出会う。諸公 諸君。洵 洵に、渦巻く、遠い、等しい。美亭 美しい旅亭。高堂 高樓、高殿。美酒 美味しい

酒。恰も 恰も、丁度。滿坐 滿座、座敷に一杯、座の一同。清風 清い風、清らかな雰囲気。衆仙 多くの仙人。東野才 東野の才人鬼才。慙 恥じる、恥、面目ない。韓公 韓公。辱なき 忝ない有り難い。競う 競争。眉山 雲仙の山の名。屋 山の頂。繞 巡る、まとう、まつわる。文秀

|| 文、文章や詩の秀劣を。紫海^{しかい} || 筑紫の海。娟^{けん} || 美しい、しなやか、まがる。比^ひす || 比べる。憾^{かん}じ || 憾、残念。各^{かく}隔^{へだ}つ || 各々別れ隔てる。白雲^{はくうん}天^{てん}に || 天
仙の帰る白雲は天に在り

。

通釈 高殿で飲む美酒は丁度泉のように、満席のの清らかな雰囲気は多くの仙人を集める、東野の才人どうして
世にないことを恥じる、韓公の交わりに有り難く喜び年を忘れる、眉山の頂を巡りて文秀を競う、筑紫の海の門に
当たり詩は美しさを比べる、只残念ながら逢いながら忽ち別れ去るを、明朝^{あした}各^{おのおの}白雲天に隔てる。

85 次邨士健見示韻

邨士健に見せ示す韻に次す

温岳西邊有玉人

温岳の西邊に玉人有り

寄身寂寞曠閑濱

身を寄する寂寞閑濱に曠し

異心一室如於越

異心一室越に於けるが如し

同調天涯似比隣

同調す天涯の比隣に似たるを

羨爾胸懷壓紫海

羨む爾の胸懷紫海を壓す

愧吾書劍老紅塵

吾は愧ず書劍紅塵に老るを

咄嗟賦就無痕鑿

咄嗟に賦就して鑿に痕無し

妙手眞成扁劉輪

妙手眞に成る扁劉輪

語釈

邨士健 人名。韻 詩韻。次す 他人の詩と同じ韻字をその順序どりに用いて詩を作ること。温岳 山の名。西邊 西方、西の辺り。玉人

勝れた人。寂寞 寂しく静か。閑濱 閑な浜。曠し 広々と空しい。異心 意見が異なる、各々心中が違ふ。一室 一つの部屋、同室。同調 意見を同じく、調子を合わせる。天涯 空の果て、大変に遠い所。比隣 村里、隣近所。似 似せる、示す。羨爾 羨むのみ。胸懷 胸襟、胸中、心中。紫海 筑紫の海。壓す 抑える、抑えつける。愧 愧る、慚愧、恥。紅塵 煩わしい世俗。咄嗟 事が急なこと、俄に。痕 痕跡、痕。鑿 鑿、穿つ、

掘る。妙手みょうて 勝れた腕前、名人、鮮やかな手。扁へん 扁平、平らな、書を書き付ける札。劉りゅう 鉞まじかり、殺す、連ねる、陳列、勝る、めぐる。

通釈 温岳のにしの辺りに勝れた人が有り、身を寄せる寂しく静かで長閑な浜に広々と空しく、意見が異なる者

が同室するは呉越のようである、意見を同じくするは空の果てのように遠い所なのに隣近所に似せるようなもの、羨むのみ胸の裡は筑紫の海を圧する、私は恥じる書や剣の道も世俗の煩わしさのうちの老いるを、俄に賦に就くも掘る痕も無い、勝れた腕前は真に成る書を書き付けて札を輪に連ねる。

86 觀水亭席上分韻得火字、

觀水、亭の席上 韻を分けて火字を得る

山陽南子久轆軻

山陽の南子久く轆軻す

一劒飄泊赤關左

一劒 飄泊す赤關を左に

過豐歷筑入肥來

を過り筑を歷して肥に入りて來り

火國炎暑眞如火

火の國の炎暑 眞に火の如し

觀水主人展禽徒

觀水の主人 禽徒を展べる

君且幸恕祖楊僕

君 且く幸恕 祖楊の僕

於戲于嗟久矣吾

於 戲に于嗟するは久しかな吾れ

不堪世間炎蒸使

えず世間の炎蒸 使むを

人忽思温仙之岳

人 忽ち温岳の仙を思ふ

陰谷之層氷

陰谷の層氷を

語釈

觀水||水、池、川、河、湖水を觀賞する。亭||あずまや、客亭。旅亭||旅館。席上||莫座、敷物、筵、坐る場所。分韻||韻を分ける。赤關

〓、下関、赤間関。南子〓南部五竹。久く〓長らく。轆轤〓車の行き悩むさま、事が思うように運ばず不幸、不遇のさま。一劔〓一劔。飄泊〓飄々と泊る。豊〓豊前、豊後。過〓通過、旅をして、過ぎる。筑〓筑前、筑後。歴〓歴訪、肥〓肥後、肥前。炎暑〓炎熱、酷暑。禽徒〓鳥類。展べる〓広げる、見せる。恕〓ゆるす、思いやる、思いやり、憐れむ。祖〓先祖、祖先の御霊や、爺。褌〓肌脱ぐ。裸〓裸。褌〓褌脱いで裸になる。戯〓冗談に、巫山戯で。于嗟〓嘆息して発す声、声をたててなげく。久なり〓久しい、長く。世間〓世の中。炎蒸〓炎のように蒸し暑い。堪えず〓堪えられない。温岳〓山名。仙〓仙人の境地。陰谷〓谷の陰。層なす氷〓厚い層をした氷。

通釈 山陽の南部五竹は長いこと事が思うように運ばないでいる、一つの劔を携えて漂い泊る赤間が関の左に、

豊前豊後過ぎり筑前筑後を歴訪して肥後に入り来る、火の國の炎暑真に火のようである、観水の亭主鳥の類を展示する、君暫く祖先の霊や幸せや思いやり裸に肌を脱ぐ「鳥を絞めて羽毛を抜くの意か」ああ戯れに声を立てて嘆く私は久しく、世の中の炎のような蒸し暑さに堪えられない、人は忽ち温岳の仙を思う、谷に陰れた厚い層を成す氷を。

87 席上走筆似雨香

席上に走す筆雨香に似たり

一樽相對暑炎空

一樽 相對して暑炎 空し

滿坐涼生少女風

滿坐到涼 生じて少女風

羨爾書窓面名岳

羨む爾か書窓 名岳に面す

雲仙立在淡雲中

雲仙 立ちて淡雲の中に在り

語釈

席上||莫座、敷物、筵、坐る場所。雨香||雨に焚く香。||似す「似る、示す。一樽||一つの樽。相對す||対面、互いに会う。暑炎||暑、

炎熱、酷暑||炎熱、酷暑。空||空、空しい。滿坐||滿席、座敷に人が一杯に。涼||涼味、涼しさ。羨爾||羨むのみ。書窓||書室の窓。名岳||有名な山。

面す||向く、向かう、面。少女風||爽やかな風。雲仙||山の名。淡雲||淡い雲。

通釈 一つの酒樽に互いに対して炎熱も空しい、滿席に爽やかな風が生まれて、羨むのみ書窓に美しい有名な山

岳に面しているのを、雲仙立ちで淡い雲の中に在り。

88 揖芬堂鬪韻得半字

揖芬の堂に韻を鬪りて半字を得る

揖芬堂主喜詞翰

揖芬の堂主 詞翰を喜ぶ

擊鮮留客屬月且

擊を鮮して客を留め月且に屬す

南子筆頭久已椿

南子の筆 頭 久しく已に椿

慚愧杜撰施點竄

慚愧す杜撰 點竄を施すを

愛君更有米癲癖

君を愛す更に米癲癖 有り

方書妙畫日展玩

方に妙畫を書して日に展玩す

霞樵墨蘭孚九書

霞樵の墨蘭 九書を孚くむ

幅々一賞輒三歎

幅々たり一賞 輒ち三歎す

紫暝長風拂熱空

紫溟なり長風 熱空を拂い

高堂六月不見汗

高堂 六月 汗を見ず

既喜六月涼如秋

既に喜ぶ六月 涼秋の如し

況又堂中多壯觀

況や又た堂中に壯觀多し

君不留我々亦留

此游元來是汗漫

但好風簷日評古

臥看温山聳天半

君 我れを留めず我れ亦留り

此の游 元來お是れ汗漫

但し好風 簷日の古評

臥し看る温山 天半に聳ゆる

語釈

揖ゆう 汲ひくむ。芬ふん 香かばしい、良い香り。堂どう 公事こうじを行なう場所、表座敷、住すまい、家きやう。闔くわん 闔くわん、取とる、闔くわんい取とる。韻いん 詩韻しうん。揖ゆう芬ふん堂どうの主しゆ 揖ゆう芬ふん

堂どうの主人しゆじん。詞翰しかん 詩や文章、手紙、書簡。鮮せん 魚ういのなます、魚、鳥獸ちゆうぶつの新あらたしい肉。擊げき 撃げきうつ、攻こうめる。留りうめ 止とどめる、留りうめる。月旦げつたん 月げつの朔しやく日にち、人物ぶつ批ひ

評ひやう、後漢こうかんの許劭しやうが從兄じゆうけい許靖しやうせいと毎月の朔しやく日に、郷里きやうりの人物ぶつに評語ひやうごをつけた故事、月旦げつたん評ひやう。屬しやく 委屬ゐしやく、頼たのむ、中間ちゆうかん、輩たい。南子なんし 南部五竹なんぶごちく。椿ちん 椿事ちんじ、一

大事だいじ。慚ざん愧き 慚ざんも愧きも恥はじじる、愧はじ。杜撰ずせん 著作しやくしやくなどで誤ごりが多いこと、宋そうの杜默とくの詩しが多く律りつに合あわなかつたという故事こしによる、粗末そまつ。點竄てんせん 字句しきう

を訂正ていせいする、點てんは消しょうすこと、竄せんは改かいめること、和算わさんの代数字だいしうじ。方書ほうしよ 四角しきかくな紙し。妙畫みやうが 見事けんじな絵え、画えく。展玩てんがん 広ひろげて味あじわい見みる。米癡まいてん癡へき 山水さんすいをこよ

なく愛あいす心こころが強い、凝こり性せい。霞樵かしょう 霞かみに棲すむ樵しょう、仙人せんじん、高たかい山さんに棲すむ樵しょう。墨蘭ぼくらん 黒くろい蘭らん。孚ふくむ 育ふむ、育ふてる孚ふ、虞よ、虞よにする、まこと、あたる、

真実しんじつが明あらかになる九書きうしよ 沢山さくさんな書しよ。幅々ふくく 立派りつぱな書しよ画が。一賞いつしやう 賞しやうする、褒ほめる。輒ちやう 輒ちやう即しやくち、たやすく、もつぱら、忽いっち、動どうかない。三歎さんたん 何なん度も

感嘆かたんする。紫溟しめい 紫むらがかった暗くらい海かい。長風ちやうふう 長ながい風ふう、長ながい間かんの風習ふうしゆ、風俗ふうしよく。高堂かうたう 高たか楼ろう、高殿かうてん。秋涼しゅうりやう 秋あきの涼りやうしさ。況けいんや まして。堂中たうちゆう 堂たうの

中ちゆう。壯觀さうかん 大だいきく立派りつぱな見物けんぶつ、盛さかんな眺ながめ。游ゆう 遊ゆうび、旅りよ。汗漫かんまん 広ひろ々として限かぎりのないさま、行いいにしまりがなくこと。好風こうふう 良りやうい風ふう、好こうましい風ふう、

風習ふうしゆ、風俗ふうしよく。 底てい、屋根おくねを葺ふきおろした軒のき、担たんう、担たんぐ。簷日えんじつ 底ていで日ひを避さける。古評こひやう 古こくからの評ひやう。臥が 横臥おうが、伏ふせる寝ねる。看みる 見みる。温山おんさん 山さん

の名な、雲仙うんせん。天半てんぱん 空くうの半はんば。聳さう 聳さうえる、つんば。元來がんらい 元々えんえん。

通釈 香ばしい風を汲む堂の亭主詩や文章を喜ぶ、新鮮な魚肉を撃ち客を留め人物批評を頼む、南部私の筆の先

に久しく既に長い。恥じる誤りが多く字句を訂正を施すことを、君を愛す更に凝り性の癖が有り、方に見事な絵を書いて広げ味わい見る、霞に棲む樵きしりの黒い蘭は書を集め育む、広げて褒め専ら何度も感嘆する、紫の暗い海は長い間の習慣で熱い空を払い、高樓の六月汗も出ない、既に喜ぶ六月秋の涼しさのようである、まして又堂の中は大きく立派な眺めが多い、君は私を留めなくても私は留まる、此の旅は元々これ広々として限りがない、但し軒で日を避けながらの好ましい風を古評する、横臥して看ると温山は空半ばに聳える。

89 登普賢岳五首

普賢岳に登る五首
ふげんだけ

幽谷多奇藥

幽谷に奇藥 多し
ゆうこく きやく

繽紛見落英

繽紛と落英を見る
ひんぷん らくえい

天飊夏亦冷

天飊の夏 亦た冷なり
てんびよう ひややか

草露午猶清

草露 午 猶 清にして
そうろ ひる なお きよ

三岳雲間峙

三岳も雲間に峙ち
さんかく うんかん そばだ

眼下横九州

九州 眼下に横たう
きゅう がんか

東西飄泊客

東西 飄泊の客
とうさい ひょうはく かく

何不思議生

何んぞ長生を思はざりき
ちようせい

喘時藉草坐

喘ぐ時に藉草に坐す
あえ せきそう ざ

渴處就藤攀

渴處 藤に就して攀り
かつしょ とう しゅう よじ

吸露過幽谷

露を吸って幽谷を過る
ゆうこく よぎ

聞鶯度夏山

鶯を聞き夏山を度る
うぐいす かざん わた

塞蹊樹盡古
橫路石皆頑
夏日寒無色
滿光林樾間
陰森幽谷裡
老樹鬱蒼藤
蔽褐逢荊棘
破鞋苦石稜
遍身六月粟
滿窟四時冰
夏虫疑今解
名山好且登
廻入鬼神谷
暫風々穴傍

けい ふさ じゆ
蹊を塞ぐ樹 盡き古し
おうろ
橫路の石 皆 頑なり
かんしよく
夏日 寒色 無し
まんこう
滿光 林樾の間
いんりん
陰森 幽谷の裡
ろうじゆ
老樹に鬱蒼の藤 ふじ
かつ おお けいきよく
褐 蔽う荊棘に逢う
けいは
鞋破 石稜に苦む くろし
へんしん
遍身 六月の粟 しよく
まんくつ
滿窟に四時の氷 ひよう
かちゆう
夏虫疑う今解すを かい
めいさん よ しばら
名山を好し且く登る
めぐりい きしん
廻入る鬼神の谷
ざんぷう
暫風 々穴の傍ら かたわ

穿林中衝碧
分草袂留香
己絕人禽跡
又無天日光
忽疑魑魅嘯
遙籟引聲長
嶮哉親跡路
藤葛一身懸
移步沙流谷
舉頭人上天
白雲脚下起
紅日幘邊翩
忽爾陰林絕
皺洋落眼前

林を穿つ巾碧の衝
草を分る袂に香を留る
己に人禽の跡を絶す
又 天日の光無し
忽ち疑う魑魅の嘯
遙なる籟お引聲く長し
嶮しき哉 跡路に親しみ
藤 葛 一身に懸り
歩を移す沙流の谷
頭を舉げれば人は天に上る
白雲 脚下に起り
紅日 幘の邊に翩る
忽爾 陰林を絶す
皺洋 眼前に落つ

語釈

普賢岳ふげんだけ雲仙うんせんの山。幽谷ゆうこく深く寂しい溪谷。奇藥きやく珍しい薬。繽紛ひんぷんもつれ乱れるさま。落英らくえい花、花房、花弁。天飈てんぴょう旋風、つむじ、清風、大風。三岳さんかく三つの山。雲間うんかん雲のじつと立つ、傍立つ、高く聳える。東西とうい東や西。峙し対峙。眼下がんか眼の下、目元。飄泊ひょうはく飄々と泊まる。長生ちやうせい長生き。喘時ぜんじ喘ぐ時、せく、喉が詰まる息が切れる。草藉そうせき草で編んだ敷物。渴處かつじょ渴いた処。藤に就き攀つ藤の蔓に掴まりよじ登る。鶯おう鶯。鶯おう鶯。度わたる渡る。蹊塞けいそく山の小道が塞がり。樹盡じゅつ樹林が終わり。路横ろおう路傍、道の横。石皆頑丈がんけん石が皆頑丈。夏日かじつ寒色かんしよく寒いさま、寒い景色。林樹りんじゅ林の木陰、樹陰、並木、街路樹。陰森いんりん森の陰。老樹らうじゅ古い木、樹木。鬱蒼うつそう青々と茂るさま。蔽おほう褐かつ粗末な衣服を被い。荊棘けいこく荊や棘。破鞋はけい草鞋が破れ。石稜せきりやう鋭角な石、石の角。遍身へんしん体中、全身、満身。粟もみ粟、鳥肌が立つ、寒さなどの為肌に粟粒のようなものが出来ること。満窟まんくつ洞窟に満ちる。四時しじ年中、四季。夏虫かちゅう夏の虫。今解葛かいげす今理解する。名山めいざん有名な山。廻入めくわい巡り、回り入る。鬼神きしん荒神、強い神、死に神。暫風せんふう暫くの風。々穴ふちやう風の穴。傍ぼう路傍。穿せんす穿孔、穴掘り。巾碧きんへき青い帯。衝しゅう要衝、要、衝く、衝き当たる、大路、大通り、衝き破る。人禽じんきん人や鶏。跡絶せきぜつす跡を絶つ。天日てんじつ太陽、日光。魍魎ちやうりやう物の怪、化け物、妖怪、魅入る、人の心を迷わす。嘯しゅう嘯く、空とぼける、口をすぼめて声を出す、声を長く引いて詩歌を詠う、唸る、吼える。籟さい籟さい松籟、籟、笛、三穴の笛、響き、音響、風が吹き通り發する音、松籟。嶮哉けんざい嶮しい。一身いっしん懸けん藤や葛に掴まり全身を懸けて。沙さ沙、砂。頭舉とうじよ頭を挙げて。紅日こうじつ太陽、日光、夕陽。幘さく頭巾、髪を包む被り物。邊へん辺りに。翻へん翻る、早く飛ぶ、ひらひらとするさま。忽爾こつじ忽然、忽ち。陰林いんりん林の陰。皺洋しわよう皺、波打つさま。

通釈 深く寂しい溪谷には珍しく不思議な葉が多い、纏もつれ乱れる花の落ちるを見る、旋風夏又冷ややかである、

草の露も昼猶清く残る、三つの山岳も雲の間に峙そはだつ、九州眼下に横たう、東西の漂い泊る客、どうして長生きを思わないであろうか、喘ぐ時に草で編んだ敷物に座り、渴いた処藤に就いて振よじ登り、露を吸って深く寂しい溪谷を

過ぎる、鶯の声を聞き夏の山を渉る、溪谷を塞ぐ樹木も古く尽きる、道端の石も皆頑丈である、夏の日寒い景色もない、光が満ちる林の木陰の間に、森の陰も深く寂しい溪谷の裡、老木に青々と茂った藤が絡む、粗末な衣服をまとい荊や棘に逢う、草鞋は破れ鋭角な石に苦しむ、満身に六月というに寒さで鳥肌がたつ、洞窟には春夏秋冬氷が満ちて入る、夏の虫が疑うを今理解した、有名な好く暫く登る、巡り入る鬼神の谷に、暫しの風を風穴の傍らに佇む、林を穿つ碧の帯を衝いて、草を分ける袂に香りを留める、既に人や鶏の跡も絶える、又太陽の光も届かない、忽ち疑う妖怪が嘯くのではと、遙かに風が吹き通り発す音を長く引く、嶮しいことである路の跡に親しみ、藤に葛に一身を懸垂して、歩を移す沙流れるの谷を、頭を挙げれば人は天に上る、白雲が脚もとから起こり、太陽は頭巾のあたりに翻る、忽然として林の陰が消えて、眼前に皺のように波打つ洋が下に見える

90 七夕別高木某

七夕に高木某と別る
たなばた

一雨昨宵過客亭

一雨 昨宵 客亭を過り
いちう さくしやう きやくてい

柳條洗出色青々

柳條 洗い出す色 青々
りゅうじやう せいせい

君別手恰今日

君と手を別すは恰も今日
て べつ あたか こんにち

不似牽牛織女星

牽牛 織女星に似せず
けんぎゅう しよくじよせい

語釈

七夕たなばた五節句の一つ、陰曆七月七日の夜、牽牛、織女の二星が天の川を渡って年に一度会うと言う伝説にもとづく、それを祭り女子が枝芸

の上達を祈る。恰こうも、丁度。昨宵さしやうタベ、昨夜、昨日の宵。客亭きやくてい旅館、旅亭。過すか過す、過ぎる。柳條りゅうじやう柳の枝、枝条。手別れてわか行

手を別れ。似せずに似ない。牽牛けんぎゅうの織女星しよくじよせい七夕の項参照。

通釈 一雨あり昨日の夕方より旅館で過す、柳の條枝が洗い出されて青々とした色をしている、君と手を別に

して丁度今日、牽牛と織女の二星が天の川を渡って年に一度逢うと云うに似ない。

91 對岳樓

がくろう
岳樓に對す

下有蒼溟上碧天

そうめい　へきてん
下に蒼溟有り上に碧天

刺天蟠海是雲仙

さ　はんかい　こ　うんぜん
天を刺す蟠海　是れ雲仙

對岳樓頭拄頰望

がくろう　こうべ　ほほ　さき
岳樓　頭に對し頰を拄えて望めば

琉璃世界挿青蓮

るり　せかい　せいれん　さ
琉璃の世界に青蓮を挿す

語釈

岳樓（えつろう）客亭の名。蒼溟（そうめい）青くて暗い海。碧天（へきてん）青い空。刺す（さ）突き抜ける。海蟠（はん）海の渦。蟠（はん）蟠る、蜷局（どくろ）を捲く、気が晴れない、横臥（わだかま）、蹲（うずま）る、曲がる。雲仙（うんぜん）山の名。拄頰（ちゐり）頰杖をつく。琉璃（るり）玉の名、紺青色で美宝で七宝の一つ。青蓮（せいれん）青い蓮。挿す（さう）挿す、活ける。

通釈　下に蒼く暗い海有り上に紺碧の空が有る、空を刺す蟠る海これが雲仙、岳樓頭に対して頰杖をして望め

ば紺青色の玉の世界に青い蓮を挿す。

92 聽濤樓

ちようとうろう
聽濤樓

終宵不寐我心切

しゆうしやう ねむ 寝らず我が心 うれ 切える

月照空洋秋色高

くうよう 月は空洋を照し 秋色 高し

豈料苓州地盡處

あに はか 料らんや苓州地の盡る處

聽濤樓上飽聽濤

ちようとうろう 濤を聽いて飽る

語釈

聽濤樓 客亭の名。終宵 宵の終わり、夜に成り、夜。寐す 寝る。心切なり 心から憂える。空洋 空に海に。秋色 秋の色。豈

豈、勝ち鬨、昇る、願う、ほっとする、どうして、なんと夫れ、殆ど、和らぐ、楽しむ。料す 量る、推量。苓州 天草。地の盡る處 地の果てる所。飽る 満足する。濤 波濤の音、大波の音。聽す 聞く、聴く。

通釈 夜に成り眠れず私の心は憂える、月は空や洋を照らし秋の色も高い、どうして知るや天草地の果てる處、

聽濤樓の上で濤を聴いて満足する。

93 似筍園

非慕遠公祇樹林
筍園今為此君尋
生徒歌詠誰靈惠
父子文章推向歆
四壁雨聲秋虫咽
一簷露氣夜山深
幡幢不動禪關寂
獨有愁人動客心
柏子焚殘蓮漏沈
青燈如豆佛龕深
書聲夜起驚僧定
月色秋寒傷客心

筍園に似たる

慕うに非ず遠公 祇だ樹林
筍園 今此に君を尋ぬるを為す
生徒 歌詠 誰か靈惠
父子の文章推して歆に向わせん
四壁 雨聲 秋虫に咽ぶ
一簷の露氣 夜山 深し
幡幢 動かず禪關 寂なり
獨りの愁人 客心を動かす有り
柏子 焚殘る蓮は漏れ沈む
青燈 豆の如く佛龕 深し
書の聲 夜 起り僧定を驚かしむ
月色 秋寒く客心を傷しむ

宅集二教欠李耳

宅 二教集る李耳を欠く

家留一子見陳琳

家に一子を留む陳琳を見る

嗟吾瓢泊苓州地

嗟 吾 瓢泊す苓州の地

蔽褐空成游子吟

褐を蔽い空しく游子の吟 成る

語釈

筍園じゅんえん 似に似る、示す。遠公えんこう 人名。祇し唯、只。樹林じゅりん 樹木の林。生徒せいと 学生。詠よ 詠う。靈惠れいけい 謝惠連と謝靈運。文章ぶんしょう

文字を連ねて、一つの纏まった意味を述べたもの。歆推きんすい 受ける、神が祭りの供物を受けける、ご馳走を受けける、喜び従う、動く、貪る。四壁しへき 四方の壁。

咽えつ 嗚咽、咽び鳴く。簪えん 底、軒、担う、担ぐ。露氣ろき 露の気。幡幢はんとう 旗、幡、幟の一種、仏堂に飾った旗。寂じやく 寂しい。愁人しゅうじん 憂い愁う人。客心きやくしん

客の心。柏はく 柏、ひのき、このてかしわ、迫る。焚た 焚き、焚き火。蓮れん 蓮、蓮燭、蓮の形をした手燭。漏沈ろうしん 漏れ沈む。青燈せいとう 青い灯火。佛龕ぶつぐん

仏壇。書聲しよせい 書をかく音、書を読む声。僧定そうじよう 僧正、僧侶、坊主。月色げつしよく 月の色。傷いた 傷心。李耳りし 老子。陳琳ちんりん 美しい玉をならべる、人名か。

琳りん 美しい玉の名。陳ちん 陳列。嗟さ 嗚呼。瓢泊ひょうはく 飄然と泊まる。褐ぬつし 粗末な衣服。蔽おほ 着る、被る。游子ゆうし 遊ぶ、旅人。

通釈 慕うのではない遠公ただ樹林、今此に君を訪ねようとする、生徒が歌を詠じ誰か謝惠連と謝靈運、父と子

文字を連ね推して喜び慕い向かわせよう、四方の壁雨の音に秋の虫が咽ぶ、一軒に露の気夜の山に深く仏堂に飾った旗も禅の閑静寂である、独り愁う人客心を動かす、書を読む声夜起こり僧正を驚かせる、月の色は秋寒く客の心を傷ましむる、宅に二教集まるも老子を欠く、ああ私は漂泊する天草の地に粗末な衣服を着て空しく旅人吟成る。